２０２１年度　公立大学法人北九州市立大学特別研究推進費　実績報告書

2022 年 4 月 28 日

北九州市立大学長　様

（所属・職名）外国語学部・准教授
（氏名）齊藤　園子

2021 年度に交付を受けた公立大学法人北九州市立大学特別研究推進費に係る研究実績について、次の通り報告します。

研究課題名	19 世紀のローマにおけるアメリカ人コミュニティの実態に関わる国際共同研究――現地調査の推進					
	合計	使用内訳（単位：円）				
交付決定額	600,000	備品費	消耗品費	報酬	その他	旅費交通費
執行額	600,000	177733	294997	42,472	78421	0
執行残額	0					
共同研究者	所属・職名		氏名		役割分担等	
	外国語学部・准教授		齊藤　園子		研究代表者	

研究分野：　英語圏文学、アメリカ研究

キーワード：　在欧アメリカ人、ローマ、文化的アイデンティティ、コミュニティ

研究成果の概要（和文）

ポストコロニアル理論や文化的アイデンティティの概念を援用して在欧経験を扱うアメリカ人作家の作品の研究を進めるとともに、19 世紀の米国ニューイングランドにおけるユートピア的共同体を扱う作品の研究にも着手した。昨年度に審査を経て掲載が決まっていた論文について校正を進めて出版に至った。また審査を経たのちに国内学会における発表が決まっていた研究について口頭発表を実施し、その後プロシーディングスがウェブ掲載された。いずれも欧州における「アメリカ人」の中間的で流動的なあり方に着目する研究である。合わせて、様々な文化的背景を持つアメリカ作家や作品を扱った論集の書評を執筆し、学会誌に掲載された。コミュニティ（共同体）という観点から、19 世紀半ばに創設されたユートピア的共同体を題材とする作品の研究について、ウィズコロナ、アフターコロナを共通テーマとするシンポジウムにおいて現時点での研究成果を発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

米国作家ジェイムズの戯曲やその舞台化に着目する研究や、舞台芸術のひとつであるミュージカルの国際的な制作過程や受容のあり方に着目する研究は少ない。本研究の観点から欧州におけるアメリカ人の中間的・流動的位置づけの有様を浮き彫りにしようとする試みの学術的意義は大きいと言える。またアメリカ人コミュニティという観点から、19 世紀ニューイングランドという米国内におけるユートピア的共同体との関連に着目する点は独創的である。

1. 研究の背景

研究代表者は、長年欧州に暮らしたアメリカ作家ヘンリー・ジェイムズ作品に着目し、欧州と米国の慣習の差異を扱う、いわゆる「国際テーマ」と呼ばれる作品群を再考することに関心を持ってきた。特に近年は、多くのアメリカ人が芸術面でも多大なインスピレーションを受けたローマに焦点をあて、在欧アメリカ人の生活実態を、同国人コミュニティという観点から研究してきた。2019 年度にはジェイムズによる最初期の作品のひとつ、*Watch and Ward* (1878)の訳書『後見人と被後見人』を出版したところである。

2. 研究の目的

上記の訳書の出版に際して行った現地調査を基盤として、さらに発展的な実態調査を行うことを目指した。特に、ローマのアメリカ人の生活において、同国人コミュニティが果たした役割に着目して現地における実態調査を拡充して進めることで、欧州におけるアメリカ人の中間的・流動的位置づけに関わる研究の精緻化が期待できる。

3. 研究の方法

研究代表者のこれまでの研究を通じて構築された研究ネットワークに基づいて国際的な研究チームを形成して研究を遂行することを計画した。2020 年度には同テーマの予備研究に対して特別研究推進費を交付していただいて研究を推進した。しかし新型コロナウィルス感染症の拡大により、共同研究者と連携して行う現地調査を実施することができなかったため、2021 年度に改めて現地調査を推進する計画を立てたものである。しかし、今年度も現地調査は見送ることとなったため、本研究の中心は、日本で調査が可能な図書やデジタル資料の利用を通じた文献調査となった。文献調査を通じて、米国内に形成されたコミュニティにも幅を広げる研究に着手することができた。

4. 研究成果

多文化状況を扱う作品が、英国において舞台化された際の状況をもとに、アメリカ人登場人物の表象の問題（アクセント、服装、行動パターン）を扱う論文[Saito, Sonoko. “Imitation and the Construction of Tradition: Henry James and the

Representation of the American Voice," pp. 161-76.]が、校正を経て第８回ヘンリー・ジェイムズ国際学会の論集（*The Sound of James: The Aural Dimension in Henry James's Work*, edited by Leonardo Buonomo, EUT Edizioni Università di Trieste, 2021, 297 pages.）に掲載されて出版された。前年度に審査を経て掲載が決まっていた論文である。また日本アメリカ演劇学会の会誌に、「＜革命＞の影響と変容――ミュージカル『レ・ミゼラブル』の文化的アイデンティティに関わる一考察」（『日本アメリカ演劇学会』第 32 号、44-64 頁。）が校正を経て出版された。当該論文も前年度に審査を経て掲載が決まっていた論文である。

合わせて事前審査を経て、オンライン（Zoom）で行われた日本英文学会第 93 回全国大会において口頭発表をするとともに、プロシーディングスがウェブ掲載された（「Henry James の国際テーマの作品における『アメリカン・コロニー』の役割」『日本英文学会第 93 回大会 Proceedings』）。

加えて、様々な文化的背景を持つアメリカ作家や作品を扱った論集『テクストと戯れる― アメリカ文学をどう読むか』（高野泰志，竹井智子編）の書評が日本ナサニエル・ホーソーン協会の会誌『フォーラム』に掲載された（59-67 頁）。また日本ナサニエル・ホーソーン協会九州支部研究会 3 月例会のシンポジウム「ホーソーン作品から考える、ウィズコロナ・アフターコロナの人、物体、環境の関係性」を企画して竹井智子氏、青井格氏、竹内勝徳氏と開催した。本シンポジウムでは司会を務めるとともに、研究発表を行った。研究発表では、米国ニューイングランドのユートピア的共同体における人間関係を扱ったホーソーン作品『ブライズデイル・ロマンス』に着目し、「ブライズデイル共同体におけるホモソーシャルな絆」と題して発表した。その他、本研究の成果の一部について、現在論文の投稿準備を進めている。

Henry James の国際テーマの作品における「アメリカン・コロニー」の役割

齊　藤　園　子

1. はじめに

Henry James の国際テーマの作品群では、登場人物がヨーロッパとアメリカの間を移動し、移動先において違和感や葛藤を経験する様が描かれる。新旧大陸の道徳や慣習の違いを浮き彫りにする形で物語が展開するため、この作品群は、ヨーロッパとアメリカの「異文化」の遭遇という二項対立的な図式で説明されることが多い。例えば *The American* の場合、アメリカ人主人公 Christopher Newman の挫折を、ヨーロッパと異なるアメリカ的な性質から生じる挫折とみなす議論は多い。しかし Newman はじめ、アメリカ人が旧大陸で経験する抑圧や葛藤は、ヨーロッパとアメリカという単純な二項対立からではなく、重層的な構造から生じている。新参のアメリカ人の悲劇や葛藤に関わる人物、*Roderick Hudson* の Christina Light や Rowland Mallet、*The Portrait of a Lady* の Madame Merle や Gilbert Osmond、*Daisy Miller* の Winterbourne や Mrs. Walker はいずれも在欧アメリカ人である。また、短編 "The Madonna of the Future"（1879）のアメリカ人画家 Theobald の悲劇は、彼が在欧アメリカ人コミュニティの中心人物に見放され、孤立を深めたことから生じている。本稿では、初期の作品における「アメリカン・コロニー（the American colony）」と呼ばれる在欧アメリカ人コミュニティに着目し、この集団の在り方に James の国際テーマの関心が向けられている可能性を指摘したい。

2.「ローマではローマのアメリカ人がするようにせよ」

「アメリカン・コロニー」は、在欧アメリカ人が集まる場所である。James の国際テーマの作品の多くが、こうしたアメリカ人コミュニティを構成していると思われる人物を描いている。在欧アメリカ人のネットワークこそ、新参のアメリカ人を迎える関係性である。Daisy Miller をはじめ、新参のアメリカ人の悲劇はヨーロッパ社会からの孤立というより、ヨーロッパの社交界の行動規範を模倣する在欧アメリカ人のコミュニティが求める行動規範から逸脱し、孤立することから生じている。James の作品では、最初期からすでにアメリカン・コロニーの存在の重要性がうかがえる。*Watch and Ward* (1878)の語り手は、結婚後まもなくヨーロッパに渡ってカトリックに改宗した Mrs. Keith について、"She had married and gone abroad; where, in Rome, she had done as the Americans do, and entered the Roman Church."（39）と説明する。これは "When in Rome, do as the Romans do." という諺を踏まえた表現である。ローマを訪れたアメリカ人は、「ローマの人々」ではなく、ローマに逗留するアメリカ人のやり方に従うというわけである。

3. Lizzie Tristram のアイデンティティ・ポリティクス

アメリカン・コロニーの構成員のコロニーとの関係性は一様ではない。*The American* の Tristram 夫婦の場合、夫 Tom の方は、コロニーの "The Occidental"というクラブに入り浸っている。彼によれば、そのクラブに行けば「あらゆるアメリカ人、少なくともあらゆる最高のアメリカ人」（33）に会うことができる。Tom がコロニーの内部で完結する人物であるのに対して、妻 Lizzie はコロニーの外のパリ社会と接点を持っている。若いころにパリの修道院で知り合ったというフランス貴族の娘 Claire de Cintré を Newman に紹介するのも Lizzie である。Donald Weber は Lizzie を「疎外されたアメリカン・コロニー」（728）の典型的存在と位置付けている。その際 Weber は、1878 年 4 月 18 日に *The Nation* に掲載された Frederick Sheldon の記事に言及する。Sheldon はフランスで会うアメリカ人を"low"と "better-bred"の２つのグループに分けている。特に後者は、ヨーロッパの慣習を模倣して同化しようとする「偽物」（355）として痛烈に批判する。後者と考えられる Lizzie は、全編を通じて同国人の Newman に寄り添うかに見えて、実は距離をとり、冷ややかに観察する中間的な存在である。

そもそも語り手は、Newman と Lizzie の関係を「ショー」（39）として描き出す。Newman の方は、Lizzie との交際をヨーロッパを学ぶためのショーと捉えている。他方 Lizzie にとっても Newman の存在は「ショー」である。彼女は「最高に面白い代物」として Newman を眺めるとともに、「偉大な西部の野蛮人（the great Western Barbarian）」（42）として見せて回るというショーの演出家としての立場も楽しむ。二人の関係は「ショー」の見世物、観客、演出家という役割をめぐりながら展開する。実に小説 *The American* はこの二人のやり取りでエンディングを迎える。最終場面の Lizzie はショーの演出家である。小説のエンディングで Newman は、Bellegarde 家に対する復讐を可能にする紙片を暖炉に投げ入れる。高い道徳性を示したかに見えるが、その直後に Lizzie が、Bellegarde 家は Newman の行動を見抜いていただろうと指摘するために、Newman は「本能的に」暖炉を振り返る。この素朴な行動は Newman の行為を愚行に転じてしまう。初期の小説における Newman

の真の試練は、フランス貴族による不当な扱いというより、この愚行であろう。そして善良な「アメリカ人」の姿を瓦解させるのは同国人の Lizzie である。彼女が終始 Newman を試し、観察し続けた結果である。

4. アメリカン・コロニーの James

同国人を見世物として演出する Lizzie は、役割上、作家 James と重なる。*The American* は、自らも在欧アメリカ人である James による読者に向けた「ショー」だからである。James は Sheldon の記事を踏まえ、約半年後、同誌に "Americans Abroad"という文章を投稿している。ヨーロッパで外部の存在であることを肯定的に捉える見方を示す文章である。しかし、ヨーロッパにおける「よそ者」としての感覚は苦悩であったと思われる。James は *The American* の執筆期、永住を視野にパリに移り住んだが、約一年後、パリを後にする。その理由は、「フランス人の底なしの表面性」や、「永遠のよそ者」いった James の手記に残された言葉に表されている。しかし「表面性」や「よそ者」としての感覚は、アメリカン・コロニーに関わるものでもあったようだ。James は滞在先のヨーロッパにおけるアメリカン・コロニーに対する不満を「アメリカン・コロニーとのもつれ」や「忌まわしいアメリカのパリ」といった言葉で手記に記している。John Carlos Rowe は、Daisy Miller に実在の在欧アメリカ人彫刻家 Louisa Lander が重ねられている可能性を指摘している。Lander は素行が原因で、彫刻家 William Wetmore Story を中心としたローマのコミュニティから孤立したとされる。合わせて Rowe は、こうしたコロニーの描かれ方に、ローマ帝国の過ちを踏まえた警告を読み取っている。欧州において外部であることを受け入れる一方で、アメリカン・コロニーの閉鎖性と表面性には共感できない James が見て取れるのだ。

5. 自分ひとりの国

James が国際的な状況を用いて描く物語は多分に「アメリカン・コロニー」の物語だと言える。同国人にコミュニティへの同化を求め、抑圧する集団の在り方が描かれている。集団が「アメリカ人」として結束性を持つとき、互いを見るまなざしは冷徹なものとなっている。その原因の一端は、在欧アメリカ人の中間的な位置取りによる、変容するアイデンティティにあると思われる。Newman を観察する Lizzie Tristram 自身、ヨーロッパ社会の「外部」として観察される位置にある。しかし Newman を「野蛮な西部人」として差異化し、その西部人のショーの演出家となるとき、自らを観察者の位置に置くことができる。Lizzie は Newman を利用することで、パリ社会の外部にある自らの位置づけを修正できる。しかしこの中間的な位置取りは、他者との関係性に依存する不安定なものである。Martha Banta は、欧州の同国人を批判する Sheldon の立場を「フランス人から蔑視的に観察されている同国人を観察するアメリカ人」（15）と表現する。同国人に向けた痛烈なまなざしは自身に返ってくるのであり、Lizzie を通して Newman に向けたまなざしは James に返ってくるのである。

欧州のアメリカン・コロニーは、母国の延長にある、縮図とも言えるコミュニティである。この意味でアメリカン・コロニーは国民国家体制に内在する恣意性や抑圧の構造を露呈していると言えるかもしれない。パリとパリ近郊を舞台とする中編 "Madame de Mauves"（1874）は、国民国家と個人の関係性に疑問を投げかける作品である。フランス貴族と結婚したアメリカ女性 Euphemia は、アメリカ人 Longmore に、フランス人との救いがたい違いに苦しまないか、と問われる。彼女は「自分の部屋や心にあるのは、名もなく、とるに足らない自分の国」だと答える（73）。しかし特定の国や集団への帰属に意味を見出さない Euphemia の位置取りも関係性からは自由ではない。彼女の姿勢は夫の死の要因となってしまう。James が描く「アメリカン・コロニー」の姿は、国民国家の恣意性や国民国家的アイデンティティの構築に関わる James の問題意識と洞察とを記録している。James は晩年、世紀転換期の激動を経て再び、初期に扱った国際テーマの都市に立ち返ることになる。

引用文献

Banta, Martha. "Introduction." *New Essays on* The American, edited by Martha Banta, Cambridge UP, 1987, pp. 1-42.

James, Henry. *The American*, edited by James W. Tuttleton, Norton, 1978.

---. "Madame de Mauves." *The Complete Tales of Henry James*, vol. 3, Digireads.com, 2010, pp. 61-107.

---. *Watch and Ward*. Boston, Houghton, Osgood, 1878.

Rowe, John Carlos. "Henry James and Globalization." *The Henry James Review*, vol. 24, no. 3, Fall 2003, pp. 205-14.

Sheldon, Frederick. "The American Colony in France." *The American*, edited by James W. Tuttleton, Norton, 1978, pp. 351-56.

Weber, Donald. "Outsiders and Greenhorns: Christopher Newman in the Old World, David Levinsky in the New." *American Literature*, vol. 67, no. 4, Dec. 1995, pp. 725-45.

（謝辞　本研究は日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究（C）（16K02502）による研究の一部です。）

本誌論文の引用文献欄においては、オハイオ州立大出版局版ナサニエル・ホーソーン百周年記念全集（*The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, 23 vols., edited by William Charvat et al., Ohio State UP, 1962-1997）を*CE*と略記しています。

フォーラム No. 27

目　次

論文

七破風の屋敷という劇場において
——憂い溢れるホーソーンのパフォーマンス …… 川下　剛（1）

『七破風の屋敷』におけるジム・クロウとホーソーンの人種意識
…… 島貫　香代子（21）

書評エッセイ（古典再読）

Michael Colacurcio, *The Province of Piety: Moral History of Hawthorne's Early Tales* …… 丹羽　隆昭（39）

コラカーシオ教授と名著再読の記 …… 成田　雅彦（49）

書評

高野泰志・竹井智子編
『テクストと戯れる——アメリカ文学をどう読むか』
…… 齊藤　園子（59）

巽孝之監修，下河辺美知子・越智博美・後藤和彦・原田範行編著
『脱領域・脱構築・脱半球——二一世紀人文学のために』
…… 福島　祥一郎（69）

Steven Petersheim,
Rethinking Nathaniel Hawthorne and Nature: Pastoral Experiments and Environmentality: …… 髙橋　愛（79）

Kenneth Dauber,
The Logic of Sentiment: Stowe, Hawthorne, and Melville
…… 髙尾　直知（87）

FORUM No. 27

Contents

Article

In a Theatre Called the House of the Seven Gables:
Hawthorne's Performance Overflowing with Distress
..... Kawashita, Takeshi (1)

Jim Crow and Hawthorne's Racial Consciousness in
The House of the Seven Gables
..... Shimanuki, Kayoko (21)

Book Reviews

書評

高野泰志・竹井智子編
『テクストと戯れる――アメリカ文学をどう読むか』

松籟社　2021年　343頁

齊　藤　園　子

『テクストと戯れる――アメリカ文学をどう読むか』は，「あとがき」によれば，京都大学名誉教授の水野尚之先生が京都大学大学院人間・環境学研究科を退職されるにあたり，水野先生のもとで学ばれた研究者が企画されて編まれた論集である。水野先生は，ヘンリー・ジェイムズ研究はもちろん，様々な領域で活躍され，文学研究の発展に尽力してこられた。水野先生の翼のもとでのびのびと研究してきた研究者は本書の執筆者だけではないだろう。先生は日本アメリカ文学会会長を務められるとともに，2021年4月15日に立ち上がった日本ヘンリー・ジェイムズ協会の会長も務めておられる。本書にはジェイムズ関係の論文が2編収められており，ジェイムズ作品に関心を持ってきた評者にとっては，この意味でも必読の論集である。

12編の論文からなる本書は，テクストとの関係性という観点から，全5部――第一部「テクストの中へ」，第二部「テクストの中で」，第三部「テクストの外へ」，第四部「テクストの外で」，第五部「テクストの間で」――から成り，多岐にわたる作家や作品，主題が扱われている。編著者である高野泰志氏の「まえがき」と竹井智子氏の「あとがき」でそれぞれ解説されているが，本書は「統一したテーマや方法論をあえて設定」せずに，「各筆者それ

ぞれの方法で多彩な対象テクストと絡み合い，戯れ合うことで，可能な限り色とりどりの模様を帯びた新たなテクストを織ることを目的としている」という (11)。「執筆者各自が最も得意とする分野で筆を揮うことが，この企画の趣旨にふさわしい」との考えからである (326)。「学生の自主性を重んじる水野先生から受けた薫陶のたまもの」としての「自由で真面目なテクストとの格闘」を重視した論集との言葉どおり (326)，いずれの執筆者も，今後も文学研究を牽引していく専門家として存分に力量を発揮して魅力的な議論を展開されている。各論文の概要は「まえがき」で高野氏が端的にまとめておられる。以下では評者に可能な範囲で各論文を紹介させていただくことにする。

第一部「テクストの中へ」を構成するのは「対象テクストの「外」にある作家の伝記というテクストから，対象テクストの「中」に切り込んだ論文」(11) である。中西佳世子氏の「ホーソーンの「幽霊」目撃体験と創作――「ハリス博士の幽霊」」は，ホーソーンが自身の幽霊目撃体験を描いた「ハリス博士の幽霊」を扱い，作家の執筆活動における幽霊目撃体験の位置づけを検討している。論者は，ホーソーンは目撃体験を単なる作品の素材としてではなく，創作サイクルに欠かせない出来事として捉えていたと指摘する。目撃体験を組み込む創作サイクルが「目撃証拠」を重視するピューリタンの著作に由来することを示した上で，ホーソーンにとって「幽霊」の目撃が「作家としての才能と資質の現れ」(35) であったとする議論には説得力がある。

柳楽有里氏の「告白の食卓――ジェームズ・ボールドウィンの『ウェルカム・テーブル』について」は，作家の最晩年の戯曲『ウェルカム・テーブル』を考察している。未発表でいまだに公刊されていない作品であるが，完成した作品とみなされるとのことである。演劇では映画と異なり「観客と俳優との間に独特の化学反応のようなものが起こり，そのために双方がそれまでとは違った人間として作り変えられる」(44) ため，ボールドウィンにとって戯曲という形式が非常に重要だったと指摘する。演劇においてはその場を共有する複数の存在が「お互いの血肉」(44) になるようなつながりが生まれ

るというのである。柳楽氏は本戯曲が不完全な告白による断片的な対話で成り立っていることに着目し，舞台上の俳優同士，そして舞台を前にした聴衆との間にそのようなつながりを生じさせることが作家の狙いであったとの考えを示す。生きるためには目を逸らさざるを得ないほどに過酷な差別の中で生きながら，差別を直視し，その根源を特定し，その連鎖を断ち切る方法を見極めようとするボールドウィンの苦しみも伝わってくるかのような論考である。

第二部「テクストの中で」は「対象テクストのみにフォーカスを当て，そのテクストに密着しながら精読した論文」(12) で構成されている。森本光氏「死者と横たわること――ポーの「大鴉」をめぐって」は，エドガー・アラン・ポーの詩「大鴉」の最後の二行に登場する "lie" (横たわる) という言葉に着目して，「癒されることのない喪失の傷」(63) を癒そうとする作家の姿勢を読み取る論考である。論者は，ギュスターヴ・ドレによる挿絵，作品内の伏線としての「座る」「立つ」といった身振り，ポーが創作過程を語る小論「創作の哲学」，そして「生きながらの埋葬」や「美女の死」を題材とするポー作品の分析を積み重ねて，「横たわる」行為が「仮死状態」を作り出していると指摘する。さらに，作品内で「嘘」という意味で直前の連に登場する "lie" が呼応関係にある可能性を示した上で，仮死が，喪失の傷を癒し，現実における喪失に対抗する領域となり得ることを論証している。

次に，玉井潤野氏の「名探偵の卵――トマス・ピンチョン『LAヴァイス』について」は，ピンチョンの『LAヴァイス』を「ハードボイルド的な意匠に対する違和感という観点」(91) から読み，この小説の主題が「孤独な男女間の恋愛」というよりも「より広い他者との共生関係」(92) であることを指摘する論考である。ミシェル・フーコーの権力概念や，作中で言及されるマンソン事件やヴェトナム戦争の問題を議論に絡めながら，作中で危機に瀕しているものが「家族」であると指摘する。合わせて危機にあるのが男性探偵像で，ピンチョンによる男性探偵表象はその「限界を見極めるための試み」(97) であるとし，映画化作品にも言及しながら，探偵的な資質をむしろ女

性登場人物の方に見出す。結びでは，同作家による『ブリーディング・エッジ』を本作品の延長上に置き，この「兄妹編」(111) に登場する女性探偵や「家族」の形に言及し，本作品の孵化版と位置づけている。

吉田恭子氏の「野球ゲームに詩はあるか？――ロバート・クーヴァー『ユニヴァーサル野球協会』の統計と詩学」は，アメリカの国民的遊戯としてのベースボールの歴史が「統計（自然科学）と逸話（文学）によって紡がれる」(116) ことを踏まえて，ファンタジー・ベースボールの流行に先立つ先見的小説と言える『ユニヴァーサル野球協会』を考察する。ベースボールの歴史について，数字だけではなく「人間的関心を引きつける端的で味わい深い挿話の積み重ねの上に成り立って」いる点できわめて「小説的」と説得力をもって指摘した上で (127)，中心人物ヘンリー・ウォーの空想野球リーグの世界をこの「野球史」の有様と重ねる。脳内野球世界は現実世界と相互に影響を与え合う関係にあり，いわば近代小説の虚構世界と重なる性格を持つのだが，結局，空想世界に「詩的正義」を求めるヘンリーによる，サイコロを操作するという意図的介入によってその虚構世界は硬直することになる。

第三部「テクストの外へ」は，「対象テクストを出発点にして，歴史状況や文化などテクストの「外」を指向した論文」(12) で構成されている。竹井智子氏の「ヘンリー・ジェイムズの「ビロードの手袋」と孤独な共存」はヘンリー・ジェイムズの最晩年の短編集『ファイナー・グレイン』に収められた短編「ビロードの手袋」における色彩に着目する。長年欧州に暮らしたジェイムズであるが，本作品に，そのジェイムズが体験した19世紀のパリと20世紀のパリ，つまり「アメリカ的価値を排除するパリ」(159) と「アメリカ的価値を排除しないコスモポリタン都市」(159-60) が「二重写しに投射」(160) されている様子を精読により示しながら議論を展開している。そして，時代の変遷がもたらす変容の中に身を置く作家自身の当惑や，本作が短編集の巻頭に収録されていることに着目し，本作を「他者の物語や新しい価値観をたとえ理解することができなくともその存在を認めるというプロセス」(165) への一歩と位置づける。

島貫香代子氏の「多様な人々、一様なふるまい――『野生の棕櫚』におけるジム・クロウの影響」は，ウィリアム・フォークナーの『野生の棕櫚』における人種・民族表象を分析している。論者は，本作品では「ヨクナパトーファ作品で描かれる南部の白人／黒人の二項対立とは一線を画した民族の多様性が存在する」が，その一方で「登場人物が繰り広げる物語は，その多様性に比べると驚くほど一様」で「帰属するグループごとに一定の棲み分けが行われて」いることを，多様な登場人物像を丹念に分析することによって指摘する (174)。そして本作が「内容の重厚さに欠け」る作品であり，「南部のジム・クロウ社会で生まれ育ったフォークナーの人種・民族意識の限界を浮き彫りにする」作品であると結ぶ (189)。

杉森雅美氏の「ジェシー・レドモン・フォーセットの『プラム・バン』――人種なりすましとモダニズム」は人種的「パッシング」を扱う論考である。杉森氏はフォーセットの再評価にあたり，フォーセットの作品が「人種のなりすまし」を「単に黒人が白人と偽る行為」として扱う作品ではなく，「人種の概念そのものを問題化」する作品として読む (198)。論者は「文学ジャンル」「物語のプロット」「語りの構造」「人種問題の考察」「モダニズム」という諸要素間の相互作用を明らかにする際，三人称の語りに時折挿入される自由間接話法について緻密な分析を展開している。その上でフォーセットの自由間接話法がハイ・モダニズムの手法を取り入れたものであると指摘する。そして，作家が人種区分の虚構性に関わる洞察を主人公が意識できない語りの層に埋めた理由を，作家に許された厳しい人種的位置取りに言及しながら考察している。

第四部「テクストの外で」は「対象テクストにもとづいて，作家の伝記というテクストの「外」を構築しようという試み」(13) である。水野尚之氏の「「山」はいずこに――イーディス・ウォートンの『夏』再読」は，ウォートンの中編『夏』における「山」表象に関わる議論を吟味している。綿密な現地調査に基づいて，「山」のモデルや作中に登場する場所の地理や環境を実証的に推測した上で，作中の地形や気象描写を検証し，土地や風土の描写が

作品の本質に密接に関わっていることを指摘する。作家自身，ニューイングランドの土地や風土を正確に描くことを本作の目的として意識していたという。「ウォートンが九年あまり住んだバークシャー地方に実際に身を置いて，「山」，ノースドーマー，そしてネトルトンのモデルと思われる土地に接する時，『夏』はもう少し厚みのある作品」(232) であるとの論者の指摘であるが，本論文は現地調査の重要性を，説得力をもって証明している。論文自体からもニューイングランドの土地の香りがしてくるように思われる。

高野泰志氏の「不眠症と神への祈り――ヘミングウェイの戦争後遺症再考」は，ヘミングウェイ作品における不眠症表象について，その解釈の糸口を作家自身の戦争後遺症に求める伝統的解釈をはじめ，これまでの研究が「あまりにも無批判に伝記と作品を結びつけてきた」(255) として再考する論文である。作家が戦場での負傷を作中で描くのは実際の負傷から10年という時を経た後であった上，作中に描かれる負傷も，作家自らの体験とは異なる虚構化されたものであると指摘する。その上で，「眠れない」状態の源泉を信仰の問題という観点から読み解く。結論部では，作中の不眠症表象は，作家の実体験としての病理にもとづくものというより，「自らがよって立つ秩序を失ってしまったことの間接的な表現」(272) との見解が示されている。論者自身が「まえがき」において読者自身による読みを招いておられるように思うので，緻密な論証の詳細については読者の読みに譲りたい。

第五部「テクストの間で」は，「複数の対象テクストを扱い，そのテクスト間にはたらく影響作用を検証する論文」(14) で構成されている。四方朱子氏の「語り得ぬ亡霊――『こころ』と「ねじのひねり」」は，夏目漱石の『こころ』とヘンリー・ジェイムズの「ねじのひねり」を併読することで，夏目漱石による内面描写の手法を浮き彫りにする試みである。欧米の文学との遭遇を契機とする日本近代文学における内面描写の歴史という観点からも興味深い論考である。「ねじのひねり」においては「亡霊」を「亡霊」のままで他者と共有する可能性が示されているのに対し，『こころ』においては「語り得ない概念」(299) であり「表現不可能」(301) な「「こころ」という

「亡霊」」(298) の他者との共有は，肉体を触媒にして表出させるという，困難を伴う方法によって行われようとしていると指摘する。

山内玲氏の「『フィラデルフィア・ファイア』における米国黒人男性版『あらし』と父子の沈黙」は，アフリカ系米国人男性作家のジョン・エドガー・ワイドマンの作品『フィラデルフィア・ファイア』におけるシェイクスピアの『あらし』の翻案をもとに，米国のアフリカ系コミュニティにおける父子関係の問題を考察している。山内氏は翻案におけるキャリバンの実父に関わる不透明な記述に着目し，作品内で言及される作家自身の自伝的要素の重要性を指摘しつつ，先行研究では議論されない「第三のキャリバン像」，つまり黒人の父と白人の母を持つキャリバン像を提示している (316)。「第三のキャリバン像」の考察にあたって山内氏が展開するキャリバンの台詞の分析は繊細である。論者はこのキャリバン像を踏まえて，作家自身が息子との関係において抱える「黒人男性の物語として回収できない混血の問題を語ることの困難」(323) が本作に暗示されていると結論する。

「まえがき」において全論文の共通点として挙げられているのが，「すべての論文が対象テクストに強く密着したうえで，綿密に精読していること」(14) である。その言葉どおり，各論文は緻密な読みを展開し，読者に新たな地平を拓いてくれる。さらに共通点として評者が付け加えるなら，いずれの論文からも，本書に現れ出ているのは各執筆者が持つ知見のほんの一角であることが感じられる点である。いずれの論文も脚注に至るまで得難い情報と見識が豊富に示されている。ヘミングウェイの氷山理論ではないが，水面下の氷山の大きさを思わせる論文ばかりであることを書き添えたい。

この論集を表現する比喩として両編者が用いておられるのが「絨毯」である。「まえがき」には，「一見雑多な論文が無秩序に並んでいるように見えるかもしれない」が，「少し離れて全体を眺め」ることで「色鮮やかな絨毯の模様」を楽しむことができるとの言葉がある (14)。この「絨毯の模様」という比喩は，ヘンリー・ジェイムズの短編 “The Figure in the Carpet” に由来する表現ではないだろうか。作品は，うだつが上がらない文芸評論家の語り

手が，ヒュー・ヴェレカーという作家の新作について書評を執筆することから始まる一人称の物語である。語り手は意気込んで取り組むが，その書評は「何もわかっていない」人物による文章だとヴェレカーに一蹴されてしまう(James 288)。自分の作品に備わっているはずの重要な要素が見落とされているというのだ。その要素とは，隅々まで行きわたって作品を成り立たせている「作品の基図のようなもの」(James 295) らしい。一方でヴェレカーは，「きっと誰にも見抜けないだろう」(James 291)，「あきらめなさい」(James 292) と語り手に忠告する。語り手や語り手の友人はこの謎かけにとらわれる。作品に織り込まれているはずの核心とも言える要素に迫るために，ヴェレカー作品にとらわれ続けるのである。友人の方はその謎を解いたようだが，語り手は解けずじまいである。本評者にとってこの作品は，それこそがジェイムズの計画なのだろうかと思いつつも，頭から離れない作品のひとつである。本論集の「まえがき」にも「最終的にどのような図像を描き出すテクストとなったかは読者の判断にゆだねたい」(14) との言葉があり，いわば謎かけが発せられているように思う。

本書から絨毯の模様が見えてきたとすれば（ジェイムズ作品の語り手と同様の立場にあることを恐れずに書くならば），民族，人種，性，言語，宗教，思想など多様な文化的背景を持つ個人や集団が共存する多文化社会アメリカと，その社会に混在する多様な声に誠実に耳を傾ける執筆者たちの姿ではないだろうか。かつてガートルード・スタインがひとつの世紀を人に例えて表現した見方にもとづくと，我々は今，21世紀が「文明化」(Stein 93) に向かう激動の若年期を生きていることになる。各執筆者が扱う作家や作品は，時間的にも空間的にも多岐にわたるが，この論集を読み終えて湧き上がってくるのは，多様性を包摂する激動のアメリカ社会を俯瞰したような感覚であろう。多様性の持つエネルギーと合わせて，その中で生きる葛藤と苦しみの狭間に身を置くような感覚である。本書は日本の研究者のコミュニティのエネルギーと奥深さを象徴する論集でもあるだろう。カバー装画も京都大学大学院人間・環境学研究科ゆかりの方によるものとのことであるが，

ピンク色と合わせてSF的な雰囲気が印象的である。ここ数年，研究集会もヴァーチャルなものが増えているが，本書は，今後も文学研究のコミュニティが活発で尽きることのない対話を引き入れる場所であり続ける未来を見せてくれているように思われる。

James, Henry. “The Figure in the Carpet.” *Selected Tales*, edited by John Lyon, Penguin, 2001, pp. 284-313.

Stein, Gertrude. *Paris, France. The Major Works of Gertrude Stein*, selected and with an introduction by Bruce Kellner, vol. 12, Hon-no-tomosha, 1993.